

安然の真如論

久保 讓

一

安然の撰述における真如の扱い方を見ると、その初期の撰述においてはさしたる見解は見られない。すなわち『教時靜』においては真如という語は用いられていないし、また『教時靜論』においても護法と馬鳴・堅慧、華嚴宗と法相宗、法相宗と三論宗における真如についての諍論に触れているのみであり、自己の見解を述べるに至っていない。また『即身成仏義私記』においても積極的な真如論が展開されてはいないのである。ところが『教時靜論』より六年後の元慶六年に撰述された『普通広釈』においては、真如が『教時問答』『菩提心義抄』におけるが如き重要な意義をもって用いられており、この変化は注目すべきものである。

すなわち『普通広釈』巻上において「真如仏性、以為戒体。一切諸法、皆是戒法体。何有非戒之法、而有犯戒之法。」（大正七四、七六六頁中）と述べ、戒体として真如仏性が

主張されている。また巻中において「戒亦三種。一伝受戒、從師所受、名句文身是也。二発得戒、白四羯磨心境発得是也。三性得戒、真如性戒、凡聖共有之。」（同前、七六七頁上）と述べ、戒に伝受戒・発得戒・性得戒の三種を立てるうち、性得戒を真如性戒と解釈し、凡聖共に本来的にそなわれるものとしての戒を考えていたようである。このように戒の根本として真如を位置づけ重視することは、後に言う如く『教時問答』『菩提心義抄』における真如の用法と共通するものである。

次に『教時問答』以前として扱ってよいものに『手草』上にあるが、そこには「問、言菩提心、正何物乎。答、真如智種子、此名菩提心也。」（日藏、天台宗密教章疏三、二〇五頁）とある。これは『菩提心義抄』において菩提心の体について四釈を挙げるうち、その第四秘秘中深秘釈として真如法性を菩提心の体となす（大正七五、四七二頁下）としていることと関連するものである。

その主著『教時問答』卷三においては「問、今真言教、何物為_レ体。答、若隨自意語、以_二一真如_一為_二真言体_一。若隨他意語、以_二一切法_一為_二真言体_一。」(同前、四二三頁上中)と述べ、如来の立場より見れば、真言教の体は一真如であることを主張している。さらに『菩提心義抄』(仁和元年撰述)においても「以_二今真言宗真如為_レ宗故、用_二真如門体_一。」(同前、五三九頁中)と表現され、真言宗の核心として真如が位置づけられている。

次いで『菩提心義抄』以後と思われる撰述として『金剛界大法對受記』があり、その巻八に注意すべき解釈がある。すなわち「然釈_二法界体性_一、四釈不_レ同。若淺略釈、諸三乗教所_レ明真如法界之理。若深秘釈、諸一乗教所_レ明真如理智十法界法。若秘中深秘釈、諸真言教所_レ明法界体性、諸尊三密。若秘秘中深秘釈、諸真言教所_レ明法界体性、四曼茶羅。今以_二五字_一為_二法界者_一、是第四釈、四曼茶羅中法曼茶羅法界体性_{云々}」(同前、一九八頁上中)とあり、ここに法界体性という言葉を解釈するに際して四釈ありとして、三乗教一乗教及び真言教における解釈を挙げている。このうち三乗教と一乗教においては法界体性と真如が関連づけられて解釈されるが、それらは淺略釈深秘釈の段階とされる。それらより深いものとして真言教の解釈があるとされ、秘中深秘釈として法界体性を諸尊三密となし、秘秘中深秘釈として法界体性を四曼茶羅とな

している。つまり法界体性についての解釈において真如と関連づけることは顕教のレベルとされるのである。したがって真如論から言うと、真如の扱いが軽くなったことになり、大きな変化である。

ここで真如の扱われ方についてまとめると、初期の『教時靜』『教時靜論』等においては真如は重視されていないが、『普通広釈』にいたって戒体として中心的なものとして登場し、『教時問答』『菩提心義抄』において真言宗の核心として位置づけられた。そして安然の晩年の撰述に属する『金剛界大法對受記』においては一転し、事相や曼茶羅に重点が移り、真如論の観点からは後退した解釈が示された。

二

上來、安然の撰述における真如論の展開を検討してきたが、『金剛界大法對受記』における変化の問題については今後の課題とし、ここでは安然の真如論形成の画期をなすと思われる『普通広釈』について考察し、安然の真如論に照明をあたたい。

戒体を真如仏性となす『普通広釈』の立場は、戒体論の上からは特異なものといわれている。その安然の主張は文脈上より見ると、『占察經』を引用して戒体論を展開していることは明白である。しかし『占察經』自体からはその戒体論は

帰結されないのである。すなわち安然是「如『占察經云』として、『観有二種。一者唯心、謂観ニ唯識。二者実観、謂観ニ真如。』（大正七四、七六頁中）」という文を真如という言葉があるために利用しているだけと思われるのである。そのことはさらにその引用文を分析してみると、『占察經』から直接に引用したのではなく、『止観輔行伝弘決』あるいはそれを引く『唐決』より引用されていると推定されるからである。その推定の根拠は、『占察經』の該当すると思われる箇所には、「若欲依二実境界修信解者、応当学習二種観道。一者唯心識観、二者真如実観。」（大正十七、九〇八頁上）とあり、安然の引用文と少し異っている。ところが『唐決』の維綱決答や広修決答には、「問、輔行決第二、引『占察經』云、観有二種。一者唯識、謂一切唯心。二者実観、謂観ニ真如。一唯識歴事、真如観理。（以下略）」（日藏、天台宗顯教章疏二、四〇一頁）とあり、また『止観輔行伝弘決』卷二之三にも同様に記されている。したがって安然所引の文の「二者実観、謂観ニ真如」という表現に注目すれば、『止観輔行伝弘決』から直接か、あるいは『唐決』所引の文より抄出されたと思うのである。ただし『唐決』や『弘決』の論旨と上記の安然の論旨との間にはずれがある。このことから推せば、安然が真如という言葉に注目し、真如仏性という語を導くために引用したに過ぎないと思われるのである。したがって安然が何

に基づいて真如論を形成しているかは、ここからは論じることができない。『普通広釈』の他の箇所にも「一切諸法、皆真如。」（大正七四、七六頁中）」という表現があり、これについて恵谷隆戒氏は涅槃經や大般若經等によるものと指摘されている（安然の普通広釈に見られる円戒思想『奥田記念仏教思想論集』収載）。ここにおいて『教時問答』や『菩提心義抄』と比較して『普通広釈』の真如論の特色を述べると、顕教的色彩の濃厚な真如論ということができる。すなわち『教時問答』巻一に「真言宗、一切諸法、皆為真如。」（大正七五、三八二頁上）とあり、『普通広釈』の先の文とほとんど同文が、真言宗としての自覚のもとに語られている点に注目したい。このことは『教時問答』においては密教として真如論を把握し、空海の真言宗について批判をなしているが、『普通広釈』においては真言宗への言及はあるものの、論評を加えていないことと関連があることが推測される。

三

安然において真如は真言宗の根本に位置づけられ、また『菩提心義抄』巻一に「凡説真如法性教、皆名真言故、凡法華等諸大乘、皆名真言秘密教也。」（同前、四七一頁下）と言ひ、顕密一致の根拠とされているが、ここにおいては真如の言語面について問題としたい。『教時問答』巻四に次の

如く言う。

答、四種曼荼羅、皆是秘教。(中略) 故釈不可思議云、問、誰説阿字。答、有三釈。一深秘釈、大日如來說此阿字。二秘中深秘釈、阿字自説阿字。三秘秘中深秘釈、真如理智説此阿字。云、此中真如理智説此阿字、是自性身自説法曼荼羅。阿字自説阿字、即是四曼荼羅皆是秘教。(同前、四三二頁中)

この文は不可思議の『供養次第法疏』巻下における「問、阿誰向三本法呼造三本不生耶。答、有三種。(中略) 一秘密釈者、毘盧遮那仏説三本不生故。二秘密中秘釈者、阿字自説三本不生故。三秘秘中秘釈者、本不生理自有三理智、自覺三本不生故。」(大正三九、八〇七頁下)という記述に对照される。すなわち『供養法疏』にいう「本不生」を「阿字」に置き換え、さらに言葉の付加をなしている。つまり『供養法疏』に「三秘秘中秘釈者、本不生理自有三理智、自覺三本不生故」とある部分が、安然において「三秘秘中深秘釈、真如理智説此阿字」となっており、特に「理智」という言葉に「真如」という語が付加され、さらにこの第三の立場は自性身の自ら法曼荼羅を説くと解釈されている点に注意したい。このように『供養法疏』の文に真如の語を付加することは、すでに『悉曇藏』巻一(大正八四、三七〇頁上)においても見られ、重視しなければならない。ここに安然が「真如の理智がこの阿字を説く」と主張することは、真如に言語活動面があることを

安然の真如論(久保)

認め、また真如が阿字の根拠となっていることを『供養法疏』を越えて表明していることになる。これは『教時問答』巻三における真言の定義の一つである「又此真言、真如体変、故名三真如言説。」(大正七五、四二二頁下)と関連が深い、さらに『菩提心義抄』巻二の「阿字を菩提心となす四釈」における「真如隨縁變現形声」(「真如變作阿字」)(同前、四八六頁下)という主張と強く対応している。特にこの『菩提心義抄』の阿字の四釈において空海の『声字実相義』を深秘釈となし、自己の真如が阿字を説くという思想をもととする阿字の解釈を秘秘中深秘釈として位置づけている点に注目したい。すなわち安然が真如に言語活動面を認めることが可能になったことである。元来、真如と阿字の関係については、『金剛頂瑜伽中略出念誦經』巻四に「於阿字上、想二円点。」真如円寂法身涅槃義也(大正十八、二五一頁上)とあり、また空海の『卍字義』においても「且以別相言、以阿字門撰一切真如法界法性實際等理、無所不撰。」(弘法大師全集第一輯、五四八頁)とあるが、真如が阿字を説くと述べ、真如と阿字とを直結することは安然に独自のものと思われる。このような考え方の背景は円仁によって台密に導入された果分可説の根拠となる天台宗の寂照不二の思想と思われる(『金疏』巻一、大正六一、十五頁上参照)。(葛南工業高校教諭)